



雪解星役者は声が命とぞ
刻といふ妙薬桜隠しかな
亡き人の言葉に生くる山ざくら
チューリップ女性兵士を諾はず
灯を消すと老いたるこちち万愚節
通夜に耳鼓つ屍春の雪
夜桜や迷彩服の子供たち
水底の揺れるごとく桜の夜
パンチパーマ完璧ダリア植ゑてをり
太陽の瞬り火の鳥花菜風
光なきガマに水音四月くる
能登の上に一際明し雪解星
草ならば牡蒿と呼ばれたし
宮線を添ふや最後の参観日
我のみの小さき一日山桜

*

小林貴子
奥山源丘
堤保徳
栗原利代子
田中純子
小池孝雄
水谷亮一
海野恵子
上村敦子
岩上諒磨
穂苅真泉
清水美智子
渡辺光
小林邦子
浜智子

蒲公英の絮はらいそを目差しけり
花吹雪浴び抜け殻になる心地
梅の香やウッドチップの鳴る小径
罹災地の一会の燭や焼柴螺
揚雲雀もう落ちるとこなき大地
ふらここや空にて母とすれ違ふ
桃の花女神はみんなちからもち
春暁の病室水母ゆらゆらと
大空に招代なびき梅まつり
引舞の丸太の拉くさしも草
若き日の吾にもありし花の蕊
近江町市場流るる雪解水
闇の世の白日のもと桜咲く
黄砂降る安曇平や闇の湖
半殺し最中に電話初手彼岸

辰野利彦
森山夕香
飯塚えり子
有手勉
土橋たか子
神作仁子
菊池理津子
黒沢孝子
大崎弘子
関禮
田中利政
二木暖
白勢修
太田滋
吉池史江

巻頭言 最近、気づくことがある。俳句を早く始めた者は人の気持がわからないのではないか。例えば定年までいっぱい働いて退職し、いわゆる晩年の楽しみに俳句を志す。自然体で年齢相応の句を作りたい。大方の俳句を志す人の気持である。残された人生、ゆっくりと俳句作りで楽しみたい。

その人が「岳」に入会する。主宰はがんばれという。私の中に若く十四歳で俳句を始めた時に声を掛けられた亡霊がどこかにあるのか、がんばれという。それが主宰者の誌友への愛情であると信じてきたのである。

どうも私は愛情過多であったかなと思う。「岳」の誌友を愛するがゆえに、自分に言い聞かせる言葉であるが、がんばれの声掛けは主宰者としてはきびしかったのか。自然体でいいよと優しく助言するのが本当の愛情であったのか。

誰でも、向上心がある。自然体でいいよとの優しさこそ、ご自分の向上心を各々がのびのびと発揚できるのではないか。ふとそんなことを思うこともある。しかし、その先がある。実はみんな「自然体でいい」と主宰の言葉の本当の真意を感じて、我が道をのびのびと邁進しているのではないか。それが「地貌」という自然体、「岳」の句は愛情に満ち洗練されていると思う。

迷彩服の子供たちとは——身辺から戦の微粒子を消したい

夜桜や迷彩服の子供たち 水谷 亮一

私は「迷彩」の語にぎくつとする。〈戦時迷彩せし壁攀づ

刻といふ妙薬桜隠しかな 奥山 源丘

桜時に雪。雪が桜を隠す。気になっていたことがあった。時間が過ぎ、人の感情は風化するもの。心配の種は後から後から現れ、他人は自分ほど真剣に気にしていないと気づく。亡き人の言葉に生くる山ざくら 堤 保徳

「死後生」とは名言だ。信頼している人があった。生きている者の言葉よりも亡きその人の言葉は生きている。「亡き人は言葉に生くる」でもある。残された言葉がすべて。当然そこには好き嫌いの生臭い感情を伴っても、時間は言葉を洗練する。山ざくらを配した気づきがいい。当初よりもなるほどと納得する時間の経過を示している。

チューリップ女性兵士を諸はず 栗原利代子

チューリップは女性兵士のスタイルを思わせる。地中海あたり、中近東をふと思ひ、やはり、戦には似合わない。感情的に拒否したい。チューリップの花の開閉を連想する、右左、

今月の秀句

通夜に耳鼓つ屍春の雪 小池 孝雄

通夜の場合に死者が耳を鼓てて聴いている。もとより幻想であるが、実感以上に緊迫感がある。みんな本音を語り、愛情に満ちている。いわれてみると、通夜とはこんな風に死者を送る場であった。春の雪も死者と過ごす一夜に相応しい。

る青嶼蛇(『青胡桃』)という少年時代のわが句がある。敵に家屋と気づかれないように壁に墨を塗り迷彩した。迷彩の言葉が私の中では戦への連想を呼ぶ。

掲句は小学生が夜桜見物の最中、交通事故などに巻き込まれないように配慮した黄色主体の迷彩服であろう。現代の最先端の服装であるが、言葉には消し難い歴史がある。当たり前の言葉「迷彩服の子供たち」に私は動揺したのである。

太陽の瞬り火の鳥花菜風 岩上 諒磨

「元始、女性は大陽であった」の平塚らいてうの言葉もいだが、これは凄。強烈な油絵。お芝居の舞台でもいい、銀河系宇宙の原始を想像する。花菜風は潤いに満ちた現実である。宇宙を飛翔する「火の鳥」の親が太陽とは。いま火の鳥は健在か。太々した俳句ができる。そこに夢がある。

水底の揺れるごとく桜の夜 海野 恵子

夜桜の白さが水面に薄い膜を演出し、底は生きものののように揺れている。夜桜は見事な演出家だ。夜桜見物はお芝居を見ているような気分を感じさせる。素晴らしい気づき。

雪解星役者は声が命とぞ 小林 貴子

雪国にも春が来て、暖かくなった。満天に雪解星。自然の舞台が用意される。役者は声に個性が出る。演技もさることながら、観客に響くのは声。ほんに声が生きていることだ。俳人も同じではないか。声を鍛えよう。

左右の女性兵士のバキバキした動きが嫌だという。

灯を消すと老いたるこころ万愚節 田中 純子

灯が潤い。消すとひとりの感じに捉われる。それを「老いたるこころ」とはいいい気づきだ。万愚節を配し嘘みたいと自嘲も効いている。案外本音であるが、お芝居感覚である。

パンチパーマ完璧ダリア植えてをり 上村 敦子

そつがない。ダリアもパンチパーマ風情に響く。きりっとパンチパーマをかけた気持とダリアを植える行為が、すつきりした洗練という日常次元から三十センチほど上がった美意識でまとまる。作者の心情的確に捉えられた佳吟だ。

光なきガマに水音四月くる 穂苅 真泉

戦場詠。僅かに水音に縋り一日も早い休戦を待つ。人間の残忍さを肯定する西洋の考え(哲学)はない。信仰ほど平和から遠いことを嫌と言うほど見せられた。マハトマガンジーの無抵抗の抵抗か。この世は永遠の乱世を思わせる。

能登の上に一際明し雪解星 清水美智子

新潟県在住の作者。空の続きに救いを期待したものか。能登の地貌の素朴さを讃え、洗練された表現は貴重だ。雪解星の輝きが新潟とはまた違うのであろう。

草ならば牡蒿と呼ばれたし 渡辺 光

男の中の男が健在とはうれしい。どこか「男なら」と演歌調が沁みる。牡蒿はキク科ヨモギ属の多年草。よもぎよりは大柄。よもぎは葦と同じに、この世の原始の草。苦みがある

が湯搔いて食用になる。牡蒿はおばあちゃんという黄疸の薬でもあった。南佐久から長野市の月例会にも参加する作者。気合いが入る。

宮線を添ふや最後の参観日 小林 邦子

「宮線を添ふ」とは冬至以後徐々に日が長くなること。珍しい漢語の季語を用い、授業参観の教室の明るさを捉え、地味ながら気づきがいい。

我のみの小さき一日山桜 浜 智子

香月泰男と同郷、三隅が故郷の作者。海光が暮らしを潤す。孤独までいかず、ひとりを楽しむ。地貌がそんな育み方を与えてくれた。七十歳を記念にエッセイ集『俳句譚』を本年四

今月の俳句

花吹雪浴び抜け殻になる心地 森山 夕香

わかるわかる。裸である。ふわっと軽くなる。このぶかぶか・ふわふわ感にはいつまでも留まらない。作者には、この気持で居たい願望があるう。しかし、「抜け殻」になって、再生をどうするか、考えないといけない。ネオテニーという青年期延長願望が俳壇に感じられたことを指摘して私は「赤ん坊・菜の花・泡の世―俳壇におけるネオテニー」(『俳壇』平成四年十二月)を書いたことがある。その後AI時代に入る。案外AIの影にネオテニー現象があるのかもしれない。

ふらふらこや空にて母とすれ違ふ 神作 仁子

母は浄土への途中、私は現世の途上。一瞬すれ違ったのである。「おかあさん」と気づいて声をかけたかどうか。切ない。ふと涙が出る。空もいまだ身近で、生活空間の範囲であった。すばらしい句である。

桃の花女神はみんなちからもち 菊池理津子

太陽神である天照大神をはじめ、戸隠伝説の歌舞の女神天鈿女命にしても力持ち。桃の花を背景に浮かぶ女神はお宅の奥方に至るまで力持ち。世の暮らしをデザインする知的な力量が備わっている。明るい作である。

春暁の病室水母ゆらゆらと 黒沢 孝子

水槽に飼育しているのではない。不安いっぱいの病室の空気を具象化したもの。とびきり期待と明るい春の暁なのに、瀰漫する心配は水母。切実感が迫る。

大空に招代なびき梅まつり 大崎 弘子

「招代」は古代学者の折口信夫が提唱した神霊を人間が招く意。依代が神霊側から呼ぶことは知られているが、掲句は人間の側からの感じ方である。梅が咲く。空に神さまがなびいておられる。梅見とは神様の精霊の気をからだに戴くのである。

引舞の丸太の拉くさしも草 関 禮

倉や家を丸太(ころ)に乗せて引く。その丸太があたりの蓬を踏み潰すという。なかなか力感横溢の場に着眼した作。

月に出した。慎重しく効い。山桜のように。

蒲公英の絮の行方―はらいそ幻想に生きる

蒲公英の絮はらいそを目差しけり 辰野 利彦

知的で少しいぶし銀風な浪漫を愛する。はらいそとはポルトガル語の天国。蝶が舞い光溢れる神さまの国。軽く、蒲公英の絮毛に行く先を託して。イタリアのアッシジの聖フランチェスコへの憧れが秘められているのか。「岳」にはフランチェスコびいきが多い。この世は汚辱に満ちる。大丈夫かとあらぬ心配をするが、清廉派は効い。

梅の香やウッドチップの鳴る小径 飯塚えり子

心地よい小径。さくさく感がいい。白梅が咲いて、足も軽いい。気持が落ちつく。自然に身を任せ、自然が支えてくれる安定感がある。俳味という詩情を掴み、ここから冒険が始まる。

罹災地の一会の燭や焼柴螺 有手 勉

産まれ在所の能登詠。祝いがあったものか。慎重しい。ぎりぎりの生活感に基づく詩情の演出が巧み。スタイルがいい句で、饒舌感がない。言葉に歯切れの良さがある。

揚雲雀もう落ちるとこなき大地 土橋たか子

あちこちで戦いがあり、雲雀が降りる余地がない。少しはあるなんていうのは理屈。最近の句の傾向には「少しはある」風な句が面白いという。私は、句材からも薄いブラックユーモアは好きではない。掲句の断定に近い潔さを評価する。

作者らしい鳥山の「山揚げ」のような大胆さがある。

若き日の吾にもありし花の蕊 田中 利政

若い日の矜持を桜の蕊から省みた。藤村の『桜の実の熟する時』をふと思ひ浮かべた。つましさが光る。

近江町市場流るる雪解け水 二木 暖

金沢市の食センター近江町市場詠。その雪解けの水流を描く。構図が単純明快。北の都好きには自然が生きてる。

闇の世の白日のもと桜咲く 白勢 修

「闇の世」と「白日」を桜花を介して結ぶ手妻の妙に注目。

黄砂降る安曇平や闇の湖 太田 滋

かつて安曇平はユーラシア大陸と陸続き。一面の湖であった。その幻想を「闇」と捉えている。泉小太郎伝説がある。作者は地理伝承に詳しいその地の小学校の校長先生。

半殺し最中に電話初手彼岸 吉池 史江

彼岸の初日にお萩を握っている最中に電話が来た。米粒の潰し半分、初手彼岸最中と、表現の妙が見どころ。

推薦候補作をあげる。

春疾風もう追ひかける事はせず 長谷川みきこ

悠々とコタンコロクル麦青む 後藤 行雄

螢鳥賊目を取り指のちくちくす 牧野きよ子

地震割れの千枚田より揚雲雀 濱野 洋子

春水や落ち込んでなどゐられない 牧野眞知子